

ペースト肥料で省力化

幡多地区営農改善協部会 水稻栽培で試験

【幡多地区】幡多地区営農改善協議会水稻部会は4月上旬の2日間、環境問題と農作業の省力化に向けた取り組みとして、昨年に引き続き水稻栽培の実証試験を行った。

肥料メーカー、農機センター、農業機械メーカー、高知県農業振興センターやJAなど約20人が参加。同地区中村支所管内の生産者



ペースト肥料の補充作業を見学する部会員ら（宿毛市で）

2人の協力を得て、肥料は片倉コープアグリ（株）の有機入り緩効性ペースト肥料（SR502）を使用し、同社がデモ機として用意した二段施肥機能を搭載し、密苗にも対応している専用田植え機を使用した。水稻は粒剤一発肥料が多く使われている。粒剤の水稲用一発肥料は肥料をプラスチックでコーティングすることにより肥効期間が調整でき、追肥の必要がないので省力化できることから普及した。ところが、肥料成分が溶出した後もプラス

チック樹脂の殻が、河川や海に流出するため、近年問題となり対策が必要となっている。これに対して、ペースト肥料は上段に元肥、苗が成長した頃、下段に施肥したもののが追肥の役割を果たし、粒剤の一発肥料と同じ効果がある。また、液肥用タンクからホースを使い、肥料の補給作業を行うことができるので、重たい肥料袋を運ぶことなく省力化が図れる。さらに、殻の残らないことはもちろん、粘性が高いため、流亡が少なく、施肥量の調整も簡単にできることから環境への負荷を低減することができる。同部会の浜田幸之

んは「前年度から継続して試験している圃場（ほじょう）において、慣行の施肥量では生育が旺盛になり過ぎ、倒伏傾向も見られたため、本年作においては減肥した。また、この技術については、専用の田植え機が必要で、ペースト肥料は若干割高ではあるが、現

在各地で試験が行われている。今後普及が進み、肥料や機械の価格が少しでも下がれば」と話した。また、同地区宿毛農機センターが4月上旬、（株）ボタの田植え機で実演会を行った。圃場を提供したのは集落営農組合の「ファームなかつの」だ。管理

する約18畝のうち約1畝を実演した。8条用田植え機で、ペースト肥料80畧分を入れるタンクがあり、GPS（衛星利用測位システム）機能で直進は自動で走行する。同組合員は「穀も残らない。肥料袋もない」と話し、「肥料の補充でこぼれた時、粒は隙間などに残る。残ったら染み込んでさびる。ペースト肥料は水で流せばいいだけ。少々の雨でも粒は詰まるがそれもない」と感心していた。